

「梅干之助」考

山口正義

筆者が所屬する古文書研究会で慶応四年（明治元年）の五日市村（あきる野市）の御用留を勉強していますが、昨年三月の例会のとき、「関東取締出役 矢澤梅干之輔」なる人物が村役人に出頭命令を出している文章を学びました。この時、「梅干之輔」は当然「うめぼしのすけ」と読んで何の疑問も抱かず、面白い名前、剽軽ひょうきんな名前と思ひ、何か経緯があるのか調べてみようと思ひました。そしてネットで調べてみましたが、「矢澤梅干之輔」で検索した為か何の情報も得られず、そのままとなってしまいました。

その後、次の例会の際、「梅干之輔」に注目されたのか、会員の方が「米津梅干之助」について調べられた資料を配られました。

「米津伊勢守」というのは以前学んだことがあるので、「米津」を「よねきつ」と読むのはうる覚えだが知っていました。問題は「梅干之助」です。配られた資料で「ほやのすけ」と読むことを知り、その由来が「熟梅の干して扁成（平たく）、皺のよりたるが海中の石（ホヤ）に似たる故、梅干と書きて、ほやとよめり。三河、遠江あたりにもこの梅干を作る故、神君家康あるとき、御家士米津氏の人に『汝が顔は梅干に似たれば梅干之助と仮名（通称のこと）を付けよ』と、君臣の睦まじき御契りよりその子孫に至るまで数代梅干之助と言ふなり」、であることを知りました。

資料を配付された会員の方には感謝あるのみですが、このことが契機となり、では『寛政譜』（寛政重修諸家譜）に記載されているだろうかと思ひ地元の図書館で調べてみました。

寛政譜で「米津」を探してみると「梅干之助」とある一番古い人が「康勝」という人で、「康勝 彦七郎 保屋助ほやのすけ 今の呈譜、梅干助まゆのすけに作る。天正元年（一五七三）より東照宮につかへたてまつる。十二年四月長久手の役にしたがひたてまつり鉄炮てつぱうに中りて臙あに傷くといへども、なを奮ひ戦ひて敵をうちとる。慶長五年（一六〇〇）関原の合戦には小栗忠正とともに先陣にすゝみ、首級を得たり。十五年めされて台徳院殿（秀忠）につかへたてまつり、御鑑奉行をつとめ武蔵國高麗郡のうちにをいて采地をたまふ（後略）』とありました。

この康勝が前述の神君から「梅干之助と仮名を付けよ」と言われた人物であろうか。その後、「正守 彦七郎 梅干助」、「政次 勘次郎 梅干助」、「盛政 三千太郎 梅干助」などとあり、代々「梅干助」が用いられたことがわかります。なお、寛政譜で「梅干之助」を引くと既述の米津氏以外では「石川政次」という人物が唯一「梅干之助」を名乗っていることがわかります。が、この石川政次は米津家に養子に行っていて既述の政次と同一人物であることが判明しました。つまり寛政譜という膨大な氏名の中で「梅干之助」が用いられたのは米津氏以外はないということでもあります。

さて、今度はネットで「梅干之助」を検索してみました。その結果幾つかの情報がありました。

まずは、鉄炮の関所通行手形に関する古文書で、寛文七年（一六六七）に川俣関所番中宛に館林城中の「馬場梅干之助」が差し出したものがあります。「群馬県立文書館」。時代的には「米津梅干之助」について古いようです。

次は『福井藩士履歴』（平成25年）に、「安西梅干之助 百石 外二銀十枚 正徳二辰（一七一二）八月廿一日於江戸御馬乗よ御取立、新番入被仰付、同日御切米」とあるといひます。ここでも、「安西梅干之助 享保十三申六月廿一日父梅干之助跡目百石被下」、「安西源五左衛門 五人扶持 享保廿卯（一七一七）二月十六日養父梅干之助為跡目願之通養子源七へ五人扶持被下」、「安西梅干之助 式拾石三人 延享元子（一七四四）九月五日養父源五左衛門跡目無相違、五人扶持被下」、というように代々「梅干之助」が嗣がれています。

その次は歌川国長（一七九〇〜一八二九）という江戸後期の浮世絵師です。初代歌川豊国の門人で、俗称

を「梅干之助」と言ったとあります。但し、この場合の読みは「かやのすけ」とあるからややこしい（「ほやのすけ」と読むのがあります）。

ところで筆者は会社定年後、主に和算を勉強しています。古文書の勉強を始めたのも和算書を少しでも読みたいと思つてのことでありましたが、それにしてはなかなか和算書も読めないのが何とも歯がゆいのです。が……。

その和算の勉強中に、たまたま「中曽根梅干之助」なる人物に突き当たりました。それも二ヶ所。一つは『数理神篇』という和算では難問の部類の算額が書いてある書物で、問題の最後に「上毛碓氷郡里見村 中曽根梅干之助那規（読みは「よしのり」か？） 安政五戊午歳正月」とあるではないか。

中曽根宗那教授
上毛碓氷郡里見村 男 中曽根梅干之助那規
同村 門人 中曽根忠太郎貞勇
安政五戊午歳正月

もう一つは高崎の八幡八幡宮やわたはちまんぐうに安政七年に掲額された算額。これを解説した書物に「中曽根梅干之助那規」の名前があるではないか。この算額は群馬県指定重要文化財になっているものですが、問題はやはり難しく簡単には解けそうにない代物です。ここまでわかれば、何としても現物を見なければ気が済みません。という訳で無謀にも事前連絡もせずに、信越本線の群馬八幡駅近くの八幡八幡宮に行つてみました。八幡八幡宮は上野國一社八幡宮であり、大きな八幡様でした。算額は昔は寺社の軒下に見えるように掲げられているのが一般的であつたようですが、最近では文化財保護の観点からそのような例は少ないようです。一応見える所に算額がないことを確認してから、社務所に行き、算額を見せて頂けないかとお願いしてみました。最初は「事前連絡が必要」とやんわりと断られました。算額の話色々こちらからしているうちに、それではということになり、大広間に案内されて見せて頂くことになりました。重要文化財の算額はきちんと保存されています。1.6×1.1mの大きな算額は迫力がありましたが、既に劣化（風化）していて読めない箇所も多い。私は近眼に老眼が入つたので、眼鏡を外し、左下面当たりを目を凝らしてみるとわずかに、そして確かに「中曽根梅干之助那規」が読めました。感激ものでした。と同時にこの「梅干之助」は何と呼ばれていたのだろうかと思ひました。「うめぼしのすけ」「ほやのすけ」、それとも「かやのすけ」……？。

「梅干之助」の例をできるだけ調べてみましたがもとより完璧ではありません。が、推測するに「梅干之助」なる名前は「仮名」にしても使われた例は少なかつたのかも知れません。

それにしても「矢澤梅干之輔」がわからずじまいであつたのは残念なことでした。そして、米津梅干之助にしても、中曽根梅干之助にしても、田舎のお年寄りに時々見かける皺くちゃだらけの、何とも味のある顔を想像してみたら、愉快に、そして幸せな気分になつてきました。私も歳とともに味のある顔になりたいものですが……。

（「古文書はむら」第4号、平成26年4月）

